

恋愛における告白の成功・失敗の規定因

小島奈々恵・大田麻琴・高本雪子・深田博己

Factors influencing success and failure of confessing one's love

Nanae Kojima, Makoto Ota, Yukiko Takamoto, and Hiromi Fukada

Love is a high interest issue for university students, and confessing one's love is an important trigger to start a love relationship. The purpose of this study was to find the factors influencing success and failure of confessing one's love. As in the preceding study, factors used were the time needed until confession, the time of confession, the place, the method, the content, the kind of relationship the partner was involved in, and the kind of acts. Newly added were the partner's notice of the confessor's love and the age difference. Also, the confessor's attractiveness thought to give the most influence to the result of the confession was newly added as a personal trait. As a result, the confessor who was successful had confessed one's love within 3 months since the acquaintance with the partner between night and mid-night, had made time to be alone together by going out together or by going out for a meal together, and had made a proposal for a relationship at the time of confessing one's love.

Key words : confession of one's love, love relationship, university students

キーワード：恋愛における告白，恋愛関係，大学生

問 題

1 研究の背景

(1) 恋愛の進展

大学生にとって、恋愛はとても関心の高い問題である。恋愛とは、性的に魅力を感じる対象に対する肯定的な感情を指し(藤原, 1995)、この感情を主な基盤として成立している対人関係を恋愛関係という。恋愛関係における研究は多岐にわたっており、松井(1990)は、①恋愛に対する態度や認知、②異性選択と社会的交換、③恋愛感情と意識、④恋愛の進行と崩壊の4領域に分類している。本研究では、これらの分類の中の「恋愛の進行と崩壊」領域の中でも、特に恋愛の初期段階における告白に焦点を当てる。恋愛行動全体の進展については既に多くの分析が進んでおり、モデルも提唱されている(松井, 1990)。さらに、恋愛関係の開始時に多々見られる「告白」に関する研究は近

年増加しており、栗林（2002）によると、恋愛における告白は「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」と定義されている。

（2）恋愛における告白

告白に関する研究が最近数例報告されている。例えば、樋口・磯部・戸塚・深田（2001）は、恋愛における効果的な告白の言語的方策は、単純型の告白方策であり、この単純型告白方策の効果の優位性は状況及び性別を問わないことを明らかにした。また、菅原（2002）は告白行動の促進・抑制に関わる要因を質問紙によって検討している。そして、関係形成の期待が促進要因として働き、拒絶の懸念が抑制要因として働くと結論づけている。さらに、栗林（2000）は大学生を対象に質問紙調査を行い、告白時の状況についての基礎的な特徴を調べた。そして、栗林（2004）は、その告白行動に影響を及ぼす様々な状況をもとに、恋愛における告白の成否の規定因に関する研究を行っている。

（3）告白の成功・失敗の規定因に関する先行研究

栗林（2004）は、高校生・大学生を対象に、告白経験やその結果、知り合ってから告白までの期間、告白時間、告白場所、告白方法、告白内容、告白までの交際行動、告白時の相手の交際状況、告白受容可能性（%）、告白時点での両者の恋愛感情の強さ（%）、さらに、個人特性として特性シャイネスと記号化スキルも測定し、それぞれの項目と告白の成否との関連を検討した。その結果、告白の成功群の多くが知り合ってから3ヶ月以内に告白をしており、二人で遊びに行く、二人で食事に行く、相手の買い物に付き合う、などの交際行動を経ている。また、被告白者が誰とも交際しておらず、片想いをしていない場合に告白が成功しやすく、成功群は失敗群よりも、受容可能性や告白時点での相手の自分に対する恋愛感情の強さの推測を高く見積っていた。さらに告白時の状況に関しては、成功群は過半数が夜に告白をしており、成功群の告白内容は「付き合ってください」といった交際の申し込みを含んだ内容であった。告白と個人特性（シャイネス・記号化スキル）の関連については、告白成功群と失敗群で違いは見られなかったが、告白経験の有無において、未経験者よりも経験者の方がシャイネスが低く、記号化スキルが高いという違いが見られた。

2 本研究の目的

（1）調査対象者の限定

告白の成否の規定因は複雑であり、樋口他（2001）と栗林（2004）においても更により多くの要因の検討が望まれると示されている。そこで本研究では、栗林（2004）の恋愛における告白の成否の規定因の研究を参考に、新たに要因を追加し、より多面的に告白の成否の規定因を検討する。

栗林（2004）では調査対象者を高校生と大学生にしているが、高校生と大学生では生活スタイルが違うため、友人関係や恋愛関係の形態も異なるのではないだろうか。例えば、高校生のほとんどは親と同居をしており、門限や様々な規制がある。そのため、交際行動を経験することや夜に告白を行うことは簡単なことではなく、好きな人との関係の進展を目的としたり、告白のような特別なイベントでない限りそのような行動はとらないかもしれない。一方、大学生は一人暮らしをしている者が多く、そのような制限が無いために、自由にお互いの家に遊びに行ったり、恋愛感情のない

異性とでも夜に会ったりできる。そこで本研究では、より細かく状況差を見るために、大学生の恋愛だけに焦点を当てて検討する。

(2) 新たな規定因の検討

告白行動をするまでの関係進展が告白結果に重要な影響を与えることが先行研究から明らかになったが、その関係進展に影響を与える要因も、間接的に告白結果に影響するのではないだろうか。関係の進展に影響を与えると考えられる要因の一つ目は、相手との年齢差である。あまり年齢が離れていると、出会う機会も少なく、出会った後も話しかける機会が少ない、話題が噛み合わない、生活リズムが違う、などの問題により関係の進展がうまくいかない可能性がある。二つ目は、告白者の恋愛感情に対して被告白者が気付いているかどうか、である。対人魅力の領域で提唱されている好意の返報性から、告白者の恋愛感情に気付いた被告白者は告白者に対して好意を持ち、それが関係進展や告白結果に影響を与えるのではないだろうか。そこで年齢差と告白者の恋愛感情に対する被告白者の気付きという2つの要因を新しく取り入れて検討する。

さらに、先行研究では告白の成否に違いが見られなかった個人特性についても、シャイネスや記号化スキル以外の個人特性を用いて、告白の成否との関連を検討する。恋愛における告白の成否に最も影響を与えられると思われる個人特性は、告白者の魅力ではないだろうか。戸塚・森・児玉・深田(2002)は、大学生を対象に39項目からなる特性リストを呈示し、理想とする異性にそれぞれの特性がどの程度当てはまるかを調査したところ、男性は理想的な女性の特性として「かわいい」、「愛嬌のある」、「顔がいい」という特性を多く選んでおり、女性は理想的な男性の特性として「頼りがいのある」、「行動力のある」、「経済的に余裕がある」などを選んでいった。このことから、魅力的な異性の特性というものはある程度共通しており、異性にとって魅力的な特性を持ち合わせている者ほど異性に好意を持ってもらえるために、告白に成功する可能性が高くなると考えられる。そこで本研究では、告白者の魅力を個人特性として告白の成否との関連を検討する。

方 法

1 調査対象者と調査手続き

(1) 調査対象者

調査対象者は大学生331名であった。回答に不備のあるものを除外し、306名(男性149名、女性157名;平均年齢20.7歳, $SD=1.05$)を分析の対象とした。

(2) 調査手続き

調査時期は2006年10~11月であった。調査者および調査協力者が調査対象者に質問紙を個別に配付・回収した。

2 質問紙の構成

(1) 告白経験

恋愛における告白の有無を尋ねた。告白経験のある者に、以下の質問項目全てについて回答させた。なお、複数告白経験のある者には最も最近行った告白について回答させた。

(2) 告白結果 (告白の成功・失敗)

告白の結果、「恋人関係になった」「恋人関係にはならなかった (友人関係になった, 関係がなくなった等を含む)」かを尋ねた。

(3) 告白の成功・失敗の規定因

栗林 (2004) で使用された項目を参考に, 知り合ってから告白までの期間, 告白時間, 告白場所 (自分の家, 相手の家, 学校など), 告白方法 (直接対面, 電話, メールなど), 告白内容 (好意の伝達, 交際申し込みなど), 告白時の相手の交際状況 (恋人がいた, 誰かに片想いをしていたなど) を尋ねた。また, 告白までの交際行動は松井・戸田 (1985) の交際行動項目を参考に作成した 33 項目について経験の有無を尋ねた。

また, 栗林 (2004) で使用された項目だけでは不足していると思われた告白の成功・失敗に影響を与える要因として, 自分の恋愛感情に対する相手の気付き (気付いていた, うすうす気付いていたなど) や, 相手との年齢差 (相手は 3 歳以上年上, 同じ年など) を新しく加えた。相手との年齢差については, 大学生 7 名 (男性 2 名, 女性 5 名) に「相手と何歳離れていると, 年が離れているという印象を受けるか」という質問をし, 得られた回答を参考にして, 「相手は 3 歳以上年上」「相手は 1~2 歳年上」「同じ年」「相手は 1~2 歳年下」「相手は 3 歳以上年下」の 5 段階を採用した。

(4) 受容可能性・自他の恋愛感情の強さと告白結果

栗林 (2002) で使用された, 告白受容可能性 (%), 恋愛感情が最高に高まった状態を 100% とした場合の, 告白時点での両者の恋愛感情の高まりの程度 (%) について尋ねた。

(5) 告白者の魅力

戸塚他 (2002) で, 現代大学生の現実の自己像, 異性に呈示する自己像, 異性に求める理想像のずれを考察するために用いられた, 特性リスト全 39 項目の中から 24 項目を使用した。特性リストは, 性格特性とその他の特性から成っていた。このうち性格特性に関しては伊藤 (1978) の M-H-F 尺度にあげられている特性が利用されているが, M-H-F 尺度は, 本来, 個人の性役割に関する価値観を測定するもので, この尺度では計 30 の性格特性が男性性特性 (Masculinity, 10 特性), 女性性特性 (Femininity, 10 特性), 人間性特性 (Humanity, 10 特性) に分類されている。戸塚他 (2002) ではさらに, 異性にアピールしたい特性や異性に求める特性は性格特性だけではないと考え, その他の特性として外見 (顔がいい, スタイルがいい), 趣味 (趣味が多様である, 熱中できる趣味がある), 経済力 (経済的に余裕がある), 政治的態度 (世界情勢に関心がある), 宗教的態度 (先祖を大切に思っている), ボランティア活動 (ボランティア活動をしている), 生活力 (料理が得意である) の 9 つを加えた。そして, それぞれの特性が現実の自分にどの程度当てはまるか (現実得点), それぞれの特性をどの程度アピールしたいか (アピール得点), それぞれの特性が調査参加者の理想とする異性にどの程度あてはまるか (理想得点) を 4 段階で評定させている。

戸塚他 (2002) で得られた, 理想得点の高い特性は, 恋愛における告白の成功・失敗の規定因としての告白者の魅力を測定する上で有用であると思われたため, 男性性特性, 女性性特性, 人間性特性の各 10 項目の特性のうち理想得点の高い方から 5 特性ずつ選び, 本研究で使用した。性格特性以外の特性 9 項目については, 全てを使用した。それぞれの特性について自分自身がどの程度当て

はまるかを4段階（1. 全くあてはまらない～4. 非常に当てはまる）で評定させた。

結 果

1 告白経験の有無

告白経験者は233名（76.1%）で、告白経験について性別でクロス集計を行ったところ、男性128名（85.9%）、女性105名（66.9%）が告白経験者で、女性よりも男性の方が告白経験率が高かった（ $\chi^2(1)=15.24, p<.001$ ）。

2 告白の成功・失敗の規定因

告白の結果「恋人関係になった」と回答した場合を告白の成功とみなした。その結果、告白成功者は137名（58.8%）、告白失敗者は96名（41.2%）となった。告白の成功・失敗と以下の要因との関連を検討した。

(1) 告白経験者の成功率の性差

告白経験者について、告白の成功率を性別で求めたところ、男性は83名（64.8%）、女性は54名（51.4%）で、女性よりも男性の方が成功率が高かった（ $\chi^2(1)=4.285, p<.05$ ）。

(2) 告白までの期間

知り合ってから告白までの期間に関して、期間×成否の χ^2 検定を行った（Table1）。その結果、成功群は「3ヶ月未満」に告白してる者が35.0%と最も多かったが、失敗群は「1年以上」の告白が45.8%と最も多かった。また、期間別に見ると、告白の成功率は、「3ヶ月未満」で81.4%と最も高く、「6ヶ月以上12ヶ月未満」で46.7%と最も低かった（ $\chi^2(3)=19.16, p<.001$ ）。

(3) 告白時の物理的状況（告白時間・場所・方法）

告白時の時間帯に関して、時間帯×成否の χ^2 検定を行った（Table2）。その結果、両群とも「18～23時台」に告白を行った者が最も多かったが、時間帯別に見ると、成功率は「0～5時台」で75.0%と最も高く、「12～17時台」で44.2%と最も低い傾向にあった（ $\chi^2(4)=8.39, p<.10$ ）。

次に告白の場所に関して、場所×成否の χ^2 検定を行った（Table3）。その結果、成功群は「自分

Table 1 告白までの期間と告白の成否との関係

	～3ヶ月未満	3～6ヶ月未満	6～12ヶ月未満	1年以上	計
成功群	48	27	21	41	137
(%)	(35.04)	(19.71)	(15.33)	(29.93)	(100.00)
[%]	[81.36]	[61.36]	[46.67]	[48.24]	
失敗群	11	17	24	44	96
(%)	(11.46)	(17.71)	(25.00)	(45.83)	(100.00)
[%]	[18.64]	[38.64]	[53.33]	[51.76]	
全体	59	44	45	85	233
(%)	(25.32)	(18.88)	(19.31)	(36.48)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率、

[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

の家」で告白を行った者が28.5%と最も多く、失敗群は「学校」が31.3%と最も多かった。場所別で見ると、成功率は「相手の家」で80.0%と最も高く、「学校」で23.1%と最も低かった($\chi^2(7)=34.73$, $p<.001$)。

そして告白の方法に関して、方法×成否の χ^2 検定を行った (Table 4)。両群とも「直接対面」で

Table 2 告白の時間帯と告白の成否との関係

	0~5時台	6~11時台	12~17時台	18~23時台	示し難い	計
成功群	30	6	19	70	12	137
(%)	(21.9)	(4.38)	(13.87)	(51.09)	(8.76)	(100.00)
[%]	[75.00]	[66.67]	[44.19]	[58.33]	[57.14]	
失敗群	10	3	24	50	9	96
(%)	(10.42)	(3.13)	(25.00)	(52.08)	(9.38)	(100.00)
[%]	[25.00]	[33.33]	[55.81]	[41.67]	[42.86]	
全体	40	9	43	120	21	233
(%)	(17.17)	(3.86)	(18.45)	(51.50)	(9.01)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

Table 3 告白の場所と告白の成否との関係

	自分の家	相手の家	学校	道端	公園	車内	示し難い	その他	計
成功群	39	28	9	14	5	8	12	22	137
(%)	(28.47)	(20.44)	(6.57)	(10.22)	(3.65)	(5.84)	(8.76)	(16.06)	(100.00)
[%]	[69.64]	[80.00]	[23.08]	[56.00]	[45.45]	[53.33]	[52.17]	[75.86]	
失敗群	17	7	30	11	6	7	11	7	96
(%)	(17.71)	(7.29)	(31.25)	(11.46)	(6.25)	(7.29)	(11.46)	(7.29)	(100.00)
[%]	[30.36]	[20.00]	[76.92]	[44.00]	[54.55]	[36.87]	[47.83]	[24.14]	
全体	56	35	39	25	11	15	23	29	233
(%)	(24.03)	(15.02)	(16.74)	(10.73)	(4.72)	(6.44)	(9.87)	(12.45)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

Table 4 告白の方法と告白の成否との関係

	直接対面	電話	手紙	メール	その他	計
成功群	106	11	2	18	0	137
(%)	(77.37)	(8.03)	(1.46)	(13.14)	(0.00)	(100.00)
[%]	[60.23]	[64.71]	[28.57]	[56.25]	[0.00]	
失敗群	70	6	5	14	1	96
(%)	(72.92)	(6.25)	(5.21)	(14.58)	(1.04)	(100.00)
[%]	[39.77]	[35.29]	[71.43]	[43.75]	[100.00]	
全体	176	17	7	32	1	233
(%)	(75.54)	(7.30)	(3.00)	(13.73)	(0.43)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

の告白をする者が7割以上を占めたが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(4)=4.55, ns$).

(4) 告白内容

告白内容に関して、告白内容×成否の χ^2 検定を行った (Table 5). その結果、成功群では「好意の伝達+交際の申し込み」の内容を用いて告白する者が51.1%で最も多かったが、失敗群は「好意の伝達」が57.3%で最も多かった. 内容別に見ると、失敗群に該当者がいない「その他」を除くと、成功率は「交際申し込み」で72.0%と最も高く、「好意の伝達」で40.9%と最も低かった ($\chi^2(4)=20.95, p<.001$).

(5) 告白時の相手の交際状況

告白時の相手の交際状況に関して、交際状況×成否の χ^2 検定を行った (Table 6). その結果、成功群では「自分に恋愛感情を抱いていた」が36.5%で最も多く、また、失敗群に比べ、「恋人がいた」「誰かに片想いをしていた」の割合が低かった. 状況別に見ると、成功率は「自分に恋愛感情を抱いていた」で89.3%と最も高く、「恋人がいた」で27.3%と最も低かった ($\chi^2(7)=44.11, p<.001$).

Table 5 告白の内容と告白の成否との関係

	好意	交際申し込み	好意+交際	遠回し	その他	計
成功群	38	18	70	10	1	137
(%)	(27.74)	(13.14)	(51.09)	(7.30)	(1.04)	(100.00)
[%]	[40.86]	[72.00]	[70.00]	[71.43]	[100.00]	
失敗群	55	7	30	4	0	96
(%)	(57.29)	(7.29)	(31.25)	(4.17)	(0.00)	(100.00)
[%]	[59.14]	[28.00]	[30.00]	[28.57]	[0.00]	
全体	93	25	100	14	1	233
(%)	(39.91)	(10.73)	(42.92)	(6.01)	(0.43)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

Table 6 告白時の相手の恋愛状況と告白の成否との関係

	恋人がいた	誰かに片想い	失恋直後	自分に恋愛感情	何もなし	分からない	その他	計
成功群	6	8	6	50	28	37	2	137
(%)	(4.38)	(5.84)	(4.38)	(36.50)	(20.44)	(27.01)	(1.46)	(100.00)
[%]	[27.27]	[29.63]	[66.67]	[89.29]	[57.14]	[57.81]	[33.33]	
失敗群	16	19	3	6	21	27	4	96
(%)	(16.67)	(19.79)	(3.13)	(6.25)	(21.88)	(28.13)	(4.17)	(100.00)
[%]	[72.73]	[70.37]	[33.33]	[10.71]	[42.86]	[42.19]	[66.67]	
全体	22	27	9	56	49	64	6	233
(%)	(9.44)	(11.59)	(3.86)	(24.03)	(21.03)	(27.47)	(2.58)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

(6) 告白者の恋愛感情に対する相手の気付き

告白するまでに、相手が自分の恋愛感情に気付いているかどうかに関して、気付き×成否の χ^2 検定を行ったが (Table 7), 有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(4)=14.96, ns$).

(7) 年齢差

年齢差に関して、年齢差×成否の χ^2 検定を行った (Table 8). 両群とも「同じ年」の相手の告白する者が最も多かったが、年齢差別に見ると、失敗群に該当者がいない「相手は3歳以上年上」を除くと「1~2歳年下」で成功率が73.4%と最も高かった ($\chi^2(4)=14.96, p<.01$).

(8) 告白までの行動

知り合ってから告白時点までの交際行動33項目について告白の成否別に経験率を求めた (Table 9). 各項目の経験の有無×成否の χ^2 検定の結果、告白の成否の差が5%水準でみられた交際行動は、「二人で遊びに行く」「二人で食事に行く」「家へ遊びに行く」「特別な用がないのに会う」「親に紹介する」であった。「親に紹介する」については失敗群のほうが経験率が高かったが、他はいずれも成功群の方が経験率は高かった。さらに、「特別な用がないのにメールする」「相談事を聞いてあげ

Table 7 告白者の恋愛感情に対する相手の気付きと告白の成否との関係

	気付いていた	うすうす 気付いていた	気付いて いなかった	分からなかった	計
成功群	36	50	33	18	137
(%)	(26.28)	(36.50)	(24.09)	(13.14)	(100.00)
[%]	[66.67]	[63.29]	[49.25]	[54.55]	
失敗群	18	29	34	15	96
(%)	(18.75)	(30.21)	(35.42)	(15.63)	(100.00)
[%]	[33.33]	[36.71]	[50.75]	[45.45]	
全体	54	79	67	33	233
(%)	(23.18)	(33.91)	(28.76)	(14.16)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

Table 8 相手の年齢と告白の成否との関係

	3歳以上 年上	1~2歳 年上	同じ年	1~2歳 年下	3歳以上 年下	計
成功群	8	28	71	29	1	137
(%)	(5.84)	(20.44)	(51.82)	(21.17)	(0.73)	(100.00)
[%]	[100.00]	[59.57]	[51.08]	[78.38]	[50.00]	
失敗群	0	19	68	8	1	96
(%)	(0.00)	(19.79)	(70.83)	(8.33)	(1.04)	(100.00)
[%]	[0.00]	[40.43]	[48.92]	[21.62]	[50.00]	
全体	8	47	139	37	2	233
(%)	(3.43)	(20.17)	(59.66)	(15.88)	(0.86)	(100.00)
[%]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	[100.00]	

(注) () 内の数値は各群あるいは群全体の回答者数を分母とした比率,
[] 内の数値は各回答肢の回答者数全体を分母とした比率

る」「子供の頃の話をする」「肩をたたいたり、体に触れる」の4項目については、成功群の方が経験率が高いという傾向が見られたが、「個人的な悩みをうちあける」「相手と口げんかする」の項目については、失敗群の方が経験率が高いという傾向が見られた。

また、交際行動項目に対し「経験なし」に0点、「経験あり」に1点を与え、33項目の合計点を求めた。この得点を従属変数として2(成否)×2(性別)の2要因調査参加者間分散分析を行った結果、どの効果も有意ではなかった。

Table 9 告白時の交際行動経験率(%)

	成功群 (n=137)	失敗群 (n=96)
友人や勉強の話をする	94.89 (130)	93.75 (90)
特別な用がないのにメールする	75.91 (104)	64.58 (62) †
相談事を聞いてあげる	67.15 (92)	56.25 (54) †
子どもの頃の話をする	63.50 (87)	52.08 (50) †
家族の話をする	67.88 (93)	63.54 (61)
グループで遊びに行く	63.50 (87)	60.42 (58)
肩をたたいたり、体に触れる	64.23 (88)	53.13 (51) †
個人的な悩みをうちあける	40.88 (56)	53.13 (51) †
二人で遊びに行く	60.58 (83)	41.67 (40) **
特別な用がないのに電話する	22.62 (31)	14.58 (14)
仕事や勉強を手伝う	36.50 (50)	44.79 (43)
寂しいとき話を聞いてもらう	35.04 (48)	27.08 (26)
二人で食事に行く	53.28 (73)	38.54 (37) *
グループで食事に行く	62.77 (86)	60.42 (58)
プレゼントを贈る	27.01 (37)	30.21 (29)
お互いの家へ遊びに行く	43.80 (66)	26.04 (25) **
特別な用がないのに会う	38.69 (53)	26.04 (25) *
手を握ったり腕を組む	16.06 (22)	12.50 (12)
相手の買い物に付き合う	31.39 (43)	23.96 (23)
キスしたり、抱き合う	13.87 (19)	8.33 (8)
相手と口げんかする	10.22 (14)	17.71 (17) †
友人として周りに紹介する	29.93 (41)	31.25 (30)
親に紹介する	2.92 (4)	9.38 (9) *
ベッティングをする	10.95 (15)	5.21 (5)
恋人として周りに紹介する	2.92 (4)	2.08 (2)
結婚の話をする	3.64 (5)	4.17 (4)
性交する	7.30 (10)	5.21 (5)
別れたいと思ったことがある	5.11 (7)	4.17 (4)
相手を殴ったことがある	1.46 (2)	2.08 (2)
結婚を相手に求める	1.46 (2)	1.04 (1)
二人だけで旅行に行く	3.65 (5)	2.08 (2)
結婚しようと約束する	0.73 (1)	1.04 (1)
結婚相手として親に紹介する	0.00 (0)	0.00 (0)

(注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

3 受容可能性及び自他の恋愛感情と告白結果

(1) 告白の受容可能性

相手が告白を受け入れてくれる可能性を従属変数とし、2（成否）×2（告白者の性）の2要因調査参加者間分散分析を行った結果、成否の主効果（ $F(1,232)=60.17, p<.001$ ）が有意で、失敗群（38.1%）よりも成功群（63.8%）の方が可能性を高く見積っていた。また、性の主効果（ $F(1,232)=6.98, p<.01$ ）も有意で、女性（46.5%）よりも男性（55.3%）の方が可能性を高く見積っていた。

(2) 告白時の自他の恋愛感情の強さ

恋愛感情の強さを完全に高まった状態を100として告白時の状態がどのくらいの割合（%）なのかを回答させた。自分の恋愛感情の強さを従属変数とし、2（成否）×2（告白者の性）の2要因調査参加者間分散分析を行ったところ、性の主効果（ $F(1,232)=4.36, p<.05$ ）が有意で、男性（81.8%）よりも女性（87.1%）の方が恋愛感情が強かった。

相手の自分に対する恋愛感情の強さの推測については、成否の主効果（ $F(1,232)=61.93, p<.001$ ）が有意で、失敗群（31.0%）よりも成功群（59.2%）の方が高く見積っていた。性の主効果（ $F(1,232)=2.97, p<.10$ ）は有意傾向にあり、女性（42.0%）よりも男性（48.2%）の方が高く見積っていた。

また、成否×性別の交互作用（ $F(1,232)=5.60, p<.05$ ）も有意で、男性は成功群（66.5%）の方が失敗群（29.8%）よりも高く見積っており、女性でも成功群（51.8%）の方が失敗群（32.1%）よりも高く見積っていたが、成功群と失敗群の差は男性の方が女性よりも大きかった。また、成功群の男性と女性では男性の方が高く見積っていた。

4 告白成功・失敗と告白者の魅力

(1) 性格特性に関する魅力

告白者の魅力を測定するために用いた24項目の特性リストのうち、性格特性に関するものとそれ以外に分け、性格特性に関するもの15項目については3因子解を指定し、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。さらに因子負荷量.40未満の項目や、他の因子との負荷量の差が.10未満であった3項目を削除し、12項目で同様の因子分析を行った（Table 10）。第I因子（ $\alpha=.81$ ）は「行動力のある」「頼りがいのある」「決断力のある」「信念を持った」「たくましい」の5項目で、「男性性因子」と命名した。第II因子（ $\alpha=.76$ ）は「温かい」「誠実な」「献身的な」「心の広い」の4項目で、「人間性因子」と命名した。第III因子（ $\alpha=.67$ ）は「色気のある」「かわいい」「おしゃれな」の3項目で、「女性性因子」と命名した。

それぞれの因子ごとの合計得点を出し、その得点を従属変数とし、因子別に2（成否）×2（告白者の性）の2要因調査参加者間分散分析を行ったところ、「女性性因子」のみで告白結果の主効果（ $F(1,232)=6.70, p<.01$ ）が有意で、失敗群（ $M=5.25$ ）より成功群（ $M=5.82$ ）の方が得点が高かった。また、成否×性別の交互作用（ $F(1,232)=3.27, p<.10$ ）も有意傾向にあり、男性は成功群（ $M=5.98$ ）の方が失敗群（ $M=5.00$ ）よりも得点が高かった。

Table 10 性格特性についての再度の因子分析 (主因子法バリマックス回転)

項目/因子	I	II	III	共通性
行動力のある	.74	.09	.09	.32
頼りがいのある	.71	.21	.09	.49
決断力のある	.66	.08	.13	.55
信念を持った	.63	.29	.02	.56
たくましい	.55	.15	.00	.45
温かい	.29	.72	.11	.42
誠実な	.16	.68	-.06	.68
献身的な	.02	.62	.10	.40
心の広い	.32	.54	.11	.32
かわいい	.10	-.05	.82	.41
色気のある	-.06	.11	.64	.62
おしゃれな	.27	.11	.48	.49
固有値	2.48	1.86	1.37	
寄与率 (%)	20.65	15.49	11.41	

(2) 性格特性以外の魅力

特性リストの24項目のうち、特性に関するもの以外の9項目についても因子分析を試みたが因子にまとまらなかったため、9項目それぞれの得点で2(成否)×2(告白者の性)の2要因調査参加者間分散分析を行った。ただし、9項目のうち外見に関する2項目「顔がいい」「スタイルがいい」については $\alpha=.73$ であったので「外見」として、合計点で分析を行った。

「外見」は成否の主効果($F(1,232)=9.50, p<.01$)と性の主効果($F(1,232)=6.39, p<.05$)が有意で、失敗群($M=3.50$)に比べて成功群($M=4.01$)の方が得点が高く、女性($M=3.55$)に比べて男性($M=3.97$)の方が得点が高かった。「趣味が多様」は成否の主効果($F(1,232)=4.70, p<.05$)が有意で、失敗群($M=2.26$)に比べて成功群($M=2.49$)の方が得点が高かった。「熱中できる趣味がある」は性の主効果が有意で($F(1,232)=4.31, p<.05$)、女性($M=2.73$)よりも男性($M=2.99$)の方が得点が高かった。「料理ができる」は性の主効果が有意で($F(1,232)=11.78, p<.001$)、男性($M=2.11$)よりも女性($M=2.50$)の方が得点が高かった。

「経済的に余裕がある」「世界情勢に関心がある」「先祖を大切に思っている」「ボランティア活動をしている」についてはどの効果も有意ではなかった。

考 察

1 本研究の知見

(1) 告白の成功をもたらす一般的規定因

本研究では恋愛における告白の成功・失敗と、告白者の性、告白までの期間、告白時の状況、告白時の相手の交際状況、告白までの交際内容、告白者の恋愛感情に対する被告白者の気付き、相手との年齢差、告白の受容可能性、告白者と被告白者の恋愛感情の強さ、そして告白者の魅力(性格特性とその他の特性)との関係を検討した。告白の成功者の特徴を、規定因ごとに先行研究(栗林, 2004)の結果と比較しながらみていく。

まず、成功者の多くは知り合ってから3ヶ月未満に告白しており、二人で遊んだり食事をしたり

といった、二人きりになる交際行動を経ている。これは先行研究と一致しており、短期間で一気に関係を進展させ、二人だけになる行動を行うことが重要だと言えるだろう。しかし先行研究では、交際行動項目の経験（経験あり1点、経験なし0点）の合計得点の差から、成功群の方がより多くの交際行動を経験していることが示されたが、本研究では有意な差は見られなかった。これは、本研究で調査対象者を大学生に限定したことが理由としてあげられるだろう。一人暮らしをしている者も多い大学生では、高校生に比べて様々な行動を異性の友人と共にすることが増えるのではないだろうか。そのため、交際行動を多く経験していることだけでは、恋愛における告白の成功に繋がらなかったのだろう。また、「個人的な悩みを打ち明ける」「相手と口げんかする」「親に紹介する」の3項目については、失敗群の方が成功群よりも経験率が高いことが示された。このことから、全ての交際行動項目が関係進展を促すものではないことが明らかになった。大学生の恋愛においては、多くの交際行動を経験することよりも、二人で遊んだり食事をしたり、家へ遊びに行ったりといった、成否に影響を与えるいくつかの特定の行動を経験できるかどうかにより、その告白の成功・失敗が関わっていると言えよう。

次に、成功者にみられる告白時の状況については、夜から深夜の時間帯に自分または相手の家で告白をしている。先行研究では告白の場所による成功・失敗の差が示されなかったが、本研究では成功者の多くが自分または相手の家で告白していることが明らかになった。お互いの家へ遊びに行くというのは、先の交際行動項目の中にも含まれており、夜にどちらかの家で2人きりになれるということ自体、ある程度の親密な関係が既に形成されている証拠とも言える。さらに先行研究と同様に、成功者は相手が告白を受け入れるだろうと考えている。受容可能性を高く見積れるということは、告白までの期間で十分な関係を相手との間に形成できていることを意味するだろう。また、告白時の相手の恋愛状況について、成功群では圧倒的に「自分に恋愛感情を抱いていた」が多く、さらに自分に対する相手の恋愛感情の強さの推測も失敗群より高かった。このことから、より成功率を上げるためには、ある程度の親密な関係になるだけでなく、相手にも自分に対して恋愛感情を抱いてもらうことが重要だということが明らかとなった。さらに、先行研究では行っていない告白者の性差を比較してみたところ、女性よりも男性の方が、受容可能性や相手の恋愛感情の強さの推測を高く見積っていた。一方、女性は男性よりも告白時の自分の恋愛感情が高まっていた。このことから、男性の方がより慎重に、より成功することにこだわって告白をしているのに対し、女性は自分の恋愛感情の高まりに従って告白していることが明らかとなった。告白経験者における告白の成功率の性差を求めたところ、女性より男性の方が成功率が高かったのも、以上のような、告白をするタイミングの性差を反映していると思われる。

告白の内容としては、「(恋人として) 付き合ってください」と交際の申し込みをはっきり伝えることが成功者のパターンとして、先行研究と一致した。告白までにある程度親密になっているため、単に好きだと伝えるだけでは恋愛関係への進展は難しいのだろう。明確に自分の意向を伝え、相手に理解させることが重要である。

さて、関係進展に影響を与えると思われる年齢差については、成功群・失敗群ともにほとんどの者が同じ年の相手に告白をしていた。また、成功群・失敗群ともに、3歳以上年上、3歳以上年下の

相手に告白した者はほとんどいなかった。このことから、やはり大学生にとって、知り合う機会も少なく、会う頻度も少ないであろう年齢の離れた相手よりも、同じ年の相手の方が関係を進展させやすいために、告白対象となりやすいと言えるだろう。

もう一つ関係進展に影響を与えられたと思われた、告白者の恋愛感情に対して被告白者が気付いているかどうか、であるが、これについては有意な結果が全く見られなかった。恋愛関係の進展においては、他の人間関係で見られるような好意の返報性の影響を受けないのかもしれない。

(2) 告白の成功をもたらす告白者の特性

ところで本研究では、告白者の魅力を個人特性として取り上げた。性格特性について、成功者は「色気のある」「かわいい」「おしゃれな」といった女性的な魅力が高かった。さらに、男性の成功群は男性の失敗群よりも、女性的な魅力が高いという傾向がみられた。このことから、女性的な魅力の度合いは告白の成功・失敗と関連があり、またそれは特に、男性において顕著にみられることが明らかとなった。女性的な魅力を持った男性は、女性からすると親しみやすいと感じ、それが成功につながったのではないだろうか。

性格特性以外の魅力について見ると、成功者は、外見（顔がいい、スタイルがいい）がよく、趣味が多様であった。やはり出会いの初期段階において身体的魅力は、その人に好意を持つきっかけとなるなど、告白の成功・失敗に与える影響は大きいと考えられる。また趣味が多様であるということは、様々な分野の知識があったり、被告白者と趣味を共有できる可能性も高いことから、被告白者に「楽しい」とか「ためになる」といったプラスの感情を覚えさせることが出来るために、告白の成功と関連するのではないだろうか。

しかし、この告白者の魅力は、告白者自身に自分にどの程度当てはまるかを尋ねたものであるの、実際に被告白者が感じる告白者の魅力とは異なる可能性がある。人によってはひどく謙遜しているかもしれないし、逆に、ナルシスティックな特性を持つ者は実際よりも自分を魅力的であると答えているかもしれない。今後は、被告白者の側から告白者の魅力を測定し、より厳密な告白者の魅力と告白の成功・失敗の関連を検討する必要があるだろう。

告白者の魅力を測定する際に用いた特性リストのうち、性格特性に関するものは、M-H-F尺度（伊藤、1978）の男性性特性、女性性特性、人間性特性の中からそれぞれ5項目ずつ使用したのだが、伊藤（1978）では女性性特性として挙げられていた「献身的な」という特性が、本研究の因子分析で、女性性因子ではなく人間性因子の方に含まれていた。これは当初の研究では女性的な特性であった「献身的な」という特性が、約30年経った現代では、男女に共通する特性に変わった結果だと言えるのではないだろうか。ある特性について、それが男性的であるか女性的であるかという意識が、ここ数十年で変わってきているため、より現代の意識に合った特性リストを用いて告白者の魅力を測定すると、新しい結果が見えてくるかもしれない。

2 まとめと今後の課題

本研究の結果から明らかとなった、恋愛における告白の成功者のパターンのうち先行研究と一致したものは、知り合ってから3ヶ月未満に夜から深夜の時間帯に告白をしていること、二人で遊び

や食事に行くなど二人きりになる交際行動を経ていること、告白時に交際の申し込みをはっきり伝えていること、であった。

告白までの交際行動の量は告白の成功・失敗には関係しておらず、成功群のほうがより多く交際行動を経験していたとする先行研究の結果とは一致しなかった。また、先行研究では有意な偏りが見られなかった告白の場所について、本研究では自分または相手の家で告白をする場合に成功率が高いことが明らかとなった。

告白時の相手の交際状況について、「自分に恋愛感情を抱いていた」という項目を増やしたところ、この項目において最も成功率が高いことが明らかとなった。また、告白までの相手との関係進展という問題に影響を与えると考えられた年齢差については、告白の成功・失敗との関連は見出せなかったが、年齢の離れている相手よりも、年齢の近い相手の方が関係進展しやすいために、告白対象となりやすいことが明らかとなった。

告白の受容可能性と告白時の両者の恋愛感情の強さについて、受容可能性と相手の自分に対する恋愛感情の強さの推測は、成功群の方が有意に高く見積っていた。この結果は先行研究と同じであるが、告白者の性の要因も加えて分析したところ、女性よりも男性の方が受容可能性や相手の恋愛感情の強さを高く見積っており、女性は男性よりも告白時の自分の恋愛感情が高まっていた。このことから女性よりも男性の方が告白に対して慎重であることが明らかとなった。

本研究では、新たに告白者の魅力を個人特性として用い、告白の成功・失敗との関連を検討したところ、成功者は、女性的な魅力が高く、外見がよく趣味が多様であることが示された。

最後に、恋愛における告白の成功・失敗の規定因は複雑で、今後さらなる検討が望まれる。一度告白に失敗しても再度アタックする積極性や、「つきあってください」と言うまでの文脈や、タイミングなども成功・失敗に作用すると考えられる。先行研究(栗林, 2004)、本研究ともに、告白者の側から告白を分析対象としたが、その告白の結果がどうなるかは被告白者の決定に委ねられている。そこで、被告白者の側から、どのような告白が有効であるかを検討することも必要であろう。

要 約

大学生にとって、恋愛はとても関心の高い問題であり、恋愛における告白は恋愛関係を開始する上で重要なきっかけとなる。本研究では、恋愛における告白の成功・失敗の規定因について検討した。先行研究に習い、使用した規定因は、知り合ってから告白までの期間、告白時間、告白場所、告白方法、告白内容、告白時の相手の交際状況、交際行動であった。自分の恋愛感情に対する相手の気付きや、相手との年齢差をも新たに加えた。また、告白結果に最も影響を与えると考えられる告白者の魅力を個人特性として新たに加えた。知り合ってから3ヶ月未満に夜から深夜の時間帯に告白をしていること、二人で遊びや食事に行くなど二人きりになる交際行動を経ていること、告白時に交際の申し込みをはっきり伝えていることが、恋愛における告白の成功者のパターンであることが示された。

引用文献

- 藤原武弘 (1995). 恋愛 小川一夫 (監修) 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp.352.
- 樋口匡貴・磯部真弓・戸塚唯氏・深田博己 (2001). 恋愛関係の進展に及ぼす告白の言語的方策の効果 広島大学心理学研究, **1**, 53-68.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 栗林克匡 (2000). 恋愛における告白時の状況に関する研究 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 396-397.
- 栗林克匡 (2002). 恋愛における告白の状況と個人差(シャイネス・社会的スキル)に関する研究 北星論集(北星学園大学社会福祉学部), **39**, 11-19.
- 栗林克匡 (2004). 恋愛における告白の成否の規定因に関する研究 北星論集(北星学園大学社会福祉学部), **41**, 75-83.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊・戸田弘二 (1985). 青年の恋愛行動の構造について(2) 日本心理学会第49回大会発表論文集, 427.
- 菅原健介 (2000). 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因—異性不安の心理的メカニズムに関する一考察— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 230-231.
- 戸塚唯氏・森 大介・児玉真樹子・深田博己 (2002). 現実の自己像, 異性に呈示する自己像, 異性が抱く理想像のずれ 広島大学心理学研究, **2**, 47-62.